



関東信越国税局管内
納税貯蓄組合連合会会長賞

『税金による支え合い』

田上町立田上中学校 三年 清水 しみず 楓花 ふうか

私は、小児慢性特定疾病の対象である病気を患っている。小学六年生の時にこの病気になり、長期の入院治療をした。今も服薬治療をしていて、今後もずっと治療が必要だ。入院中に母が主治医から指定難病であること、二十歳未満までは、小児慢性特定疾病医療費助成制度、二十歳以降は指定難病の医療費助成制度を利用できることなどの説明を受けた。どちらの制度も医療費の一部を公費(税金)で負担するという制度である。

私は一回の通院で複数の診療科での診察や検査を受け、薬代も高額になる。かかる医療費は、小児慢性特定疾病医療費助成を受けることができ、この制度のおかげで経済的な心配をせずに医療を受けることができる。この制度について調べてみると、先天性代謝異常や血友病の医療給付事業などを統合し、児童福祉法の一部を改正する法律に基づいて二〇一五年から施行されたことが分かった。今、私はこの制度をあたり前のように受けることができている。どれだけ多くの方たちがこの制度の必

要性を訴え続けてきたのかを詳しくは知らないが、とてもありがたいことだと感じている。公費医療は、多くの人が支払った税金が使われている制度だ。

私がこの制度を知るまで、生活の中で意識していた税金は消費税や学校などの教育費、救急車の出勤などの消防費などくらいだった。しかし、自分が医療の助成を受けるようになり、税金について調べてみた。失業した時にお金を受け取ったり、老後の年金や家族が亡くなった時の遺族年金など、社会保障にも税金が使われるなど様々な面で、私たちの生活が税金に助けられて暮らしていることが分かった。このように安心して生活していくために必要な公的サービスを維持するための社会保障にも税金は不可欠である。

日々の買い物で支払う消費税や給料から支払う所得税などは、自分のお金が減ってしまう感覚になる人も多いと思う。しかし、その税金が今、同じ国に住んでいる困っている人の生活を救ったり、守ったりできる大切な財源になっている。私は税金は取られるものというマイナスなイメージがあつたけれど、調べることを通して、税金は人と人を支え合うものだと感じた。

私は将来の仕事について悩んでいる。持病と向き合い、治療を続けながらできる仕事はあると信じている。就職し、税金を納める立場になった時には、今までの感謝の気持ちを忘れずに納税したいと思う。私は大人になっても医療費助成を受け、様々な面で助けられながら生活していくことになるだろう。感謝の気持ちだけでなく、自分が働いて納めた税金で誰かを助けることもできる。税金による支え合いが現在だけではなく、次の世代へとつながって、よりよい社会になってほしいと願う。